

19日夕、東京・南青山で開かれた黒川清氏の祝賀会に出た。もともと海外にも並外れた人脈を持つ方だ。国会が設置した福島原発事故調査委員会(国会事故調)の委員長を務め、海外からさらに大きな関心を集めた。

科学ジャーナリスト 小岩井 忠道

## 規制の虜と学者の責任

会の「科学の自由と責任賞」も受賞している。与野党国会議員、官僚、科学者、ジャーナリスト、駐日各国大使館員など……。100人余りの祝賀会参加者表を眺めて思った。相当親しい人たちがかりに違いない、と。

だ。インタビュー欄や寄稿欄に何度も登場願ったから、育ての親でもあろう。

「事故の根拠的原因は地震以前にある」。国会事故調査報告書に、こんな記述があったのを思い出す。東京電力、原子力安全委員会、経済産業省原

「規制の虜」という表現も、話題になった。規制する側に十分な専門的知識がなく、規制する立場と規制される立場が逆転し「規制当局は電気

する日常的な取材は、他の科学記者たちもしてなかつたと思われる。電力会社は、規制当局を虜にしていただけでなく、規制当局ほど科学記者からも監視されていなかった、ということだ。福島原発事故で大きな議論を呼び起こした中

筆者は黒川人脈の小枝に引っかけよう。存在だが、人一倍お世話になっている。7年間編集に関わった「サイエンスポータル」の生みの親の一人が、黒川氏なの

子力安全・保安院、さらに経産省本体が、まともなやり玉に挙がっている。

「それまでに当然備えておくべきこと、実施すべきことをしていなかつた」と容赦しない。長年、科学記者をやってきたから、この批判はよく分かる。通信社勤務時代、規制当局である原子力安全委員会や事務局

に、科学者の責任もある。科学者個人というより、科学者集団、科学アカデミーがちゃんと役割を果たしたか、という問題だ。

米国、英国など欧米先進諸国に比べ、日本の科学アカデミーの力は明らかに弱い。例えば米科学アカデミーは、年間200から300もの報告書を提出している。ほとんどが米政府の審議依頼に



こいわい。ただみち 1945年中国・上海生まれ。水戸、日立市で育つ。水戸一高、東京工業大学工学部卒。共同通信科学部長、メディア局長などを経て2006年科学技術振興機構「サイエンスポータル」初代編集長。12年、13年3月同編集委員。茨城県人会連合会常任理事、いばらき大使、水戸大使。

局には毎日のように顔を合わせていた時期もある。しかし、電力会社には足が向かなかつた。経済記者の守備範囲だから、東京電力や日本原電に対

が米政府の審議依頼に

せ、代わりに日本学術会議が政府の審議依頼を引き受ける。さもないと変わらないのではないか。科学アカデミーが政府の虜になっている現状は